

タイ王国北部の旅（2011年の記録） —タイ文化圏を往く—

前田栄三¹⁾ 2)、齋喜國雄²⁾

1) 京都大学学士山岳会、2) 雲南懇話会

アジアの旅の始まりは15年程前に遡る。中東地域と成田を定期的に往復する途次離着陸するバンコクのドンムアン国際空港は、私（前田）にとって文字通りのハブ空港となった。この間の訪問先は、ネパールのカトマンズ、中国雲南省の昆明/景洪、ラオスのヴィエンチャン/ルアンプラバン、ヴェトナムのホーチミン、カンボジアのシエムリアップ、タイ国内ではチェンマイ、チェンライ、メーホンソン、ナーン、プーケット、ハジャイ、サムイ島などである。何れも3～4日、長くて1週間程度の滞在であったが、それまで南周りの航路を利用することの無かった私には、実に興味深いアジアの旅路であった。

タイ王国国内でも、陸路、中部のパタヤ、チャム、アユタヤ、カムチャナブリ、スコタイ、北部のメーサイ、チェンセン、北西部のパーイ、クンユーム等を訪問してきた。

実に漠然とはあるが、何時からともなく気になることがあった。雲南省プソソパンナ/タイ族自治州の州都・景洪、ラオスの旧首都・ルアンプラバン、そしてタイ王国の北タイの諸都市（チェンマイ・チェンライ・メーサイ・パーイ・メーホンソン）及びその近郊を訪問した際に感じた空気、換言すれば自然の温もり、そこに住む人々の柔らかな表情・笑顔、地域に密着した生活の様子、祭の踊り・鮮やかな衣裳など等、これら地域に共通するように感じたその空気、山懐或いは母親の懷に抱かれるような感慨は一体何だろう…、気になっていたことである。

ボンと膝を叩くような得心を得た思いがしたのは、「タイ（シャン）文化圏」という言葉に接した時である。2009年4月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のクリスチャン・ダニエルズ教授の研究室内の懇談でのことであった。

タイ文化圏¹⁾

タイ諸語を日常的に話す民族は、中国雲南省西南部&東南部からヴェトナム西北部、ラオス、ミャンマー北部&東北部、及びインドのアッサム州に跨って分布している。これを「タイ文化圏 (Tai Cultural Area)」と呼んでいる。

バンコクを首都とするタイ王国 (King of Thailand) の北部も「タイ文化圏」に属している。この地域は、古都チェンマイを中心とする所謂「北タイ」である。主要な町にはチェンライ、ナーン、チェンセン、メーサイ、パーイ、メーホンソン、クンユーム、メーサリアン、スコタイ等がある。タイ王国の中部（アユタヤ・バンコク、ナコン・サワン）、東北部及び南部諸州は、言語学的に「タイ文化圏」とは異なる、という。

ダニエルズさんによれば「タイ文化圏」の名付け親は、同研究所の新谷忠彦教授とのこと。文献

1) の序文で、京都大学名誉教授の故 石井米雄さんは、「新谷氏の先駆的業績は、現在四カ国の国境に分断されてしまっているインドシナ半島北部に、「シャン文化圏」と名付ける文化圏の存在を学術的に実証した。」と記述している。

2011年に実施した「タイ文化圏Study Tour」

下記4項目を目的として、2011年2月と7月に実施した。日程等については、本文末尾に掲載した。

- (1) タイ王国の北タイ西部及び北部の街、少数民族の村々を訪問し、生活文化の一端に触れる。
- (2) 古都チェンマイの国立博物館・古寺を訪れ、Lanna 王国等の歴史を偲び、学ぶ。
- (3) タイ王国の最高峰 ドイ・インタノン (2565 m) 山頂に立つ。
- (4) 北タイに残る旧日本軍将兵の「慰霊碑」「戦

争記念館」、遺品を保管している「寺院」等を訪れ、慰霊する。彼ら将兵が歩んだ（進軍し敗走した）「道」「橋」を通り、往時を偲び鎮魂の意を表す。

始めに北タイの山岳地帯に住む少数民族について、概観してみたい。以下に「北タイの NGO 活動の歴史と課題」と題する立教大学・田中治彦氏の論考²⁾から抜粋して掲載（『内』）する。

『タイ国内にはおよそ 100 万人の山岳民族が居住し、その多くが北タイ各地に住んでいる。主要にはモン、ミャン、ラフ、リス、アカ、カレンの 6 民族であるが、その他の少数民族を合わせると 20 を越える民族がタイ国内に存在すると言われている。彼らの多くは山岳部に住み、伝統的な焼畑農業や狩猟採取で生計を立て、民族ごとの独自の宗教、文化、衣装を持つ。

タイ山岳民族が抱える問題は、経済的な貧困に起因する諸問題がある。それらは教育医療施設の不足、麻薬の密売、出稼ぎや売買春、その結果のエイズ感染などである。これに加えて 1990 年代以降の山岳民族固有の問題として北タイの NGO は次の 3 つ問題に取り組んでいる。ひとつは国籍問題である。タイ政府は長いこと山岳民族をタイ国民とは見なしてこなかった。そのため山岳民族は県境を超えて移動することができず、また就学、就職などで不利益を被っていた。近年国際的な世論にも押されてタイ政府は一定の条件下でタイ国籍の取得を認めるようになったが、現在も国籍を取得しているのは該当人口の半数程度である。こうした状況を改善するのが NGO の役割のひとつである。

次に、居住権の問題がある。山岳民族が多く住んでいる北部の山岳地帯はほとんどが国立公園や保護林などの形で国有地となっている。しかし、彼らの多くはタイ国の土地制度が制定される以前から何世代もその土地に暮らしていた。にもかかわらず彼らには住んでいる土地に居住し資源を管理し生計を立てる基本的な権利が認められていない。1998 年に国立公園の区域内で山岳民族の立退き問題が起こったことを契機に、「共有林法」制定促進の運動が活発化した。この法律は、土地の所有権は国に属するとしうえて、その土地の利用権を山岳民族や地元住民に認めるという内容である。



図 1 タイ文化圏概略図、新谷原図より眞島建吉作成。

三番目に、山岳民族の固有の文化、伝統、宗教の保護の問題である。山岳民族の生活が苦しく、権利も抑圧されるなかで、地元の村を離れて都会に住む人々も増加している。また、山岳民族の村にも商品経済が浸透し、観光客が訪れることにより、独自の文化が失われる危険性が高まっている。とりわけタイ政府による公立学校の設立やテレビ、パソコンの普及はこうした流れを促進する。彼らの伝統文化や宗教や独特な風俗をいかに保持していくかが大きな課題となっている。』

更に「タイの NGO の課題」の項の冒頭、次のように述べている。

『タイの社会は 1980 年代後半を境に急速に変化した。そのため山岳民族が抱える問題のように貧困に起因する古典的な開発問題と、家庭崩壊や環境汚染など先進工業国と共通する現代的な開発問題とが併存している。現在のタイの問題は「貧困」そのものよりも「貧富の格差」にあるといつてよからう。』

（ここで言う「現在」とは、2004～2005 年のことを指す。前田 註）

中国国民党軍の侵入と占拠³⁾

国籍の問題、山地（森）に生きる人達の居住権の問題など、陸続きの国境線を持たない日本人から見れば何れも根源的（当たり前）な問題に映る。しかし幾世代にも亘ってその地域に住んでいる人達（山地民）にとっては、全く自分達の預かり知らない世界としか言いようが無いだろう。更に国際政治の荒波、即ち中国共産党軍との内戦に敗れた中国国民党軍のビルマ・シャン州進入と山地支配、タイ〜ミャンマー国境地域の広大な土地（山岳地帯）の不法占拠。そしてビルマ・中国共同の掃討作戦（1960年11月発動）に迫られた国民党第三軍と第五軍のタイ領内（北タイ）への移住が加わる。第三軍の移住先はチェンマイ県タムゴップ、段希文將軍率いる第五軍はチェンライ県メーサロンである。

7月19日、私達はメーサロンを訪問した。緩やかな丘陵の続く丘の上から見ると、文字通り見渡す限り茶畑が広がっている（写真1）。中華民国政府から最高品質の茶の栽培を許可されているという。昼食を摂ったレストランは、台湾の観光客で大いに賑わっていた。段希文將軍の墓所も、車窓から見る事が出来た。



写真1 中国国民党軍が移住したメーサロンの風景

Golden Triangle の位置とケシ栽培の様子（アヘン博物館で手渡された絵葉書から転載）



雲南のラフ族、移住と国際政治の影⁴⁾

雲南西南部にあった仏教徒ラフの半独立政権は、1887年、中国清朝によって滅亡した。19世紀末の英国によるビルマ植民地化に危機感を持った清朝が、雲南辺境部の実効支配を強化した結果である。ビルマのチェントウンに逃亡した仏教徒ラフ達は、1904年にアメリカのキリスト教宣教師によって集団改宗を受け始める。熱狂的な集団改宗運動が発生した。1949年、中国で共産党政権が樹立されると、雲南のキリスト教徒ラフは「英米帝国主義者の走狗」と見做され弾圧の対象となった。国民党軍残党と反共蜂起するも敗れ、ビルマ側に逃亡する。その一部は、1960年代に入るとタイ側に渡り、キリスト教徒ラフによるCIAの諜報部隊を結成し、諜報工作要員をビルマ・ラオスの中国国境に送り込んでいた。CIAのラフ諜報部隊は、米中和解を受けて1972年に任務を終了する。そこで彼らは1973年、ビルマ国境に近いドイトウン山頂付近に新たな村を建設し、ビルマ側の同胞に大規模な移住を呼び掛けることに

なった。ラフ族の移動（受難）の軌跡も注意を払っておきたい。

7月19日、私達はドイトウンを訪問。メーファールアン（Mae Fah Luang）庭園を散策し、故王母陛下の御用邸内を視察した。1987年、故王母陛下の御用邸が建造されることを期に、ドイトウン王室開発プロジェクトが発足し、2011年は第2期の最終年、第3期は2026年まで継続の予定となっている。当初は、ケシ栽培と焼畑を止めさせインフラを整備し雇用機会を与える（生み出す）ことに注力した。この地域の山岳民族を、他のタイ国民同様に自立させることを最終の目標としている。麻薬患者の治療と社会復帰のための職業訓練センターなどもある。

その他、訪問した山岳民族の村々、王室プロジェクトのこと等

- ・2月22日、パーイ郊外の中華村（南湖山地村）と祭りの最中のリス族の村
- ・2月23日、ラフ族のボークライ村、メーホンソンの北方・茶の栽培を生業とした中華村（ラクタイ村）、シャン族のルアンタイ村。ルアンタイ村の上部に新しい観光村があり、王室プロジェクトで開発されたリゾート地の出入門管理をしている。観光事業を生業にしているようだ。リゾート開発された一帯（写真2）はミャンマー国境に近く、かつてはケシの栽培が広範囲に行われていたことだろう。
- ・2月24日、カレン族のホイ・ソータップ村（首長族の村）
- ・2月25日、メーサリアンの西南50km弱の、サルウイン河畔の国境の村・メーサムレップ。山道を走行の途中、カレン族の昔ながらの家々・子供達の遊ぶ姿を車窓から見る。
- ・2月26日、チェンマイ、ドイ・スティーブの奥の山地に住むモン族の村。
- ・7月17日、ラフ族のMakham Pom村（CHIANG DAOとFANGの中間）、隣接するカレン族のYapa村（首長族）とアカ族のLorcha村（タートン寺院の東方、メーサロンの西南方、ミャンマー国境に近い）
- ・7月18日、メーサイでミャンマーに初入国、Golden Triangleでアヘン博物館を視察、その後メコンを渡りラオスの村を訪問。中国資本が

大々的にラオス領のメコン河畔に進出しているのを目撃した。

- ・7月20日、チェンコーンでメコンを渡りラオスのフエサイへ。ランテン（Lantan）族の村と酒造りのNam krok村を視察。

タイの最高峰、ドイ・インタノン（2565m）山頂に立つ

チェンマイから南西に位置するドイ・インタノン国立公園は、タイの最高峰ドイ・インタノンを中心に482 km²の広がりを持ち、多くの観光客が訪れる、タイを代表する国立公園のひとつである。山地林を中心とする森が豊かに残り、野鳥の種類が多いことでも知られている。

タイ最高峰のドイ・インタノンは、チェンマイ市内から約100 km西にある。チェンマイ市内から国道108号線を南下し国道1009号線で右折。32 kmほど進み国道1192号線との分岐線で、国道1009号線に向けて右折。緩やかな山岳道路を10 kmほど行くと到着する。

梅棹忠夫さんはその著作⁵⁾の中で、メー・ホーイという村を登山基地としたこと、ジープを置いたこの基地からの山頂往復に丸8日間を要したことが記されている。「メー・ホーイは、山すその明るい農村だった。水田の間に、20戸ばかりの農家が、ばらばらと立っていた」と描写している。今では、鶏の丸焼き店が軒を連ねる一帯が、恐らく彼らの登山基地だったのだろう。車道はここから長い登りに入る。

私達は、この山麓の村から半日で山頂を往復した。勿論、舗装された快適な山岳道路と4輪駆動車のお蔭である。山頂周辺の森林公園の木道を歩き、滝を眺め、麻薬栽培に依存していた山岳民族の自立を支援する、王室プロジェクトの広大な農業センター（Royal Agricultural Station INTANON）も見ることが出来た。このセンターは、この地に住む山岳民族（カレン族）の主な収入源であったケシ栽培を止めさせ、代替作物を生産・販売させることを目的として、1979年に設立された。

ドイ・インタノンの植生について、千葉県立中央博物館 原正利氏の論考⁶⁾から、2～3、引用する。今後のドイ・インタノン訪問時の参考にしたい。1996年以降、日本・タイ共同研究として、山地林に15 haの大面积長期継続調査区を設置して調査が

行われており、京都大学も参加している。調査区は、海拔約 1700 m の山地林内に設置してあるという。2008 年以降、この調査区を中心に、着生植物を主体とした林冠部分に生育するコケ、シダ、種子植物のフロラ調査と生態調査を開始している⁷⁾。

- ・ドイ・インタノンの植生は、他の多くの熱帯山岳と共通に、標高 1000 m 前後を境に大きく変化し、低地帯と山地帯に区分される。両帯の境界部付近にはケシヤマツが特徴的に出現する。
- ・海拔 1000 m ～ 1500 m 付近は、ケシヤマツやイジユを交えたシイ・カシ類の二次林が卓越する標高域で、原生的な森林はほとんど残されていない。
- ・海拔 1600 m 付近から頂上 (2565 m) にかけては、原生的な山地林が比較的連続してよく残されている。
- ・頂上付近は樹高 15 m ほどの森林で、樹木の幹や枝には蘚苔類が多量に着生して、いわゆるコケ林の様相を呈している。
- ・標高に伴い、気温が低下するのとは逆に、降水量や空中湿度は急速に上昇していくのが、この地域の山岳の気候的な特徴である。チェンマイ (海拔 314 m) の年平均気温は約 26℃、年降水量は約 1200 mm。頂上では、約 13℃、約 2300 mm になる。
- ・ミャンマー北部から雲南省南部、タイ北部、ラオス北部、ヴェトナム北部にかけての地域は、横断山脈の更に南に連なる連続した低山地帯である。海拔 2000 m ～ 3000 m 程度の山並が延々と連なり、気候的にも同一性が高い。ドイ・インタノンは、この低山地帯の南限をなす山と言ってよい。その為、山地帯のフロラ^{註)}や植生は、上記の地域との共通性が高いのであろう。(註:「植生」が「植物群落」によって典型的に地域の特徴を表すのに対して、フロラ (植物相) は地域に生育する全ての植物を同定して、種名などを記した種のリストで表す。前田記)

チェンマイ郊外、タイ・ビルマ方面戦病没者追悼之碑と慧燈財団⁸⁾ (写真 3、4)

2 月 21 日、チェンマイの朝市 (トンラムヤイ市場) で用意した供花 (花輪) を持ち、歩いて「追悼の碑」に向かっていた私達は、境内を清掃していた女性から 1 枚の紙 (碑建立の趣意書) を手渡

された。私自身、地元チェンマイの情報誌で「碑」の存在を知り何度かお参りに訪れていたが、碑の建立に至る経緯に触れたのは、この時が初めてである。趣意書には大要、以下のような記述があった。

『平成元年タイ北部のチェンマイを訪れた調寛雅前理事長は、「タイ北部にはまだ多数の日本兵が埋められたままになっているのに、日本人はこれを顧みない。日本人は人間か!」とタイの老僧より一喝を受けました。ここから十年以上に亘る遺骨収集活動が始まりました。

収集した遺骨はタイ国チェンマイ県にあるバンカート学校内に「タイ・ビルマ方面戦病没者追悼之碑」を建立 (平成 5 年) し、納骨しました。その横には、大梵鐘鐘楼を建立 (平成 14 年) し未だ収集されず草生す屍となって眠る方々をその梵音で追悼しております。これらの活動が機縁となり、日本在住の邦人から里親を募り、タイ北部の貧しいけれど学習意欲のある中高校生に奨学金を援助する教育里親制度を立ち上げ、これまでに延べ 5170 人以上の学生達に奨学金を支給して参りました。後略』

以下、慧燈財団のホームページから引用して掲載する。

『昭和 16 年 12 月に大東亜戦争勃発後、援蒋ルートへの破譲及びインド独立を目指す日本軍は、インド独立義勇軍と共にビルマに入り、当時イギリス領であったインド北東部の都市＝インパールを占領すべく軍事行動を起こした。

しかし、作戦は困難を極め死者 7 万人余り (一説には餓死者が 10 数万人) を出し、ついに昭和 19 年 7 月、この作戦は中止となる。その後日本兵は、タイ国メーホンソーン県からチェンマイ県への道を通して、ビルマ (現ミャンマー) より撤退した。数多くの日本兵は、更にこの撤退の途中で亡くなり、遺骨や遺品などは撤退路に放置されたままとなった。

当時、撤退の日本兵に対してタイの人々は暖かかった。食事を与えたり、負傷し傷つきマラリア等の病気に苦しむ日本兵には薬を与えたりした。日本兵も、彼らの村の農作業や子守り等すすんで現地の人を手伝った。そしていつの日からか、日本兵とタイの人々との間には、微笑ましい穏やかな友情が芽生えたのである。それ



写真2 Pangtong Royal Project で開発されたリゾート地



写真4 全員で参拝。

から年月は流れ激動の時代だった昭和から平成へと年号も変わり、日本人の誰もが、先の大戦の事など忘れて太平の享楽にふけていた。

平成元年、カンボジア難民慰問の帰りに佐賀県の僧侶及び遺族の一行は、チェンマイ県を訪れた。その時会ったタイの老僧よりこんな言葉が一行に投げかけられた。

「ここにはまだ多くの日本兵が眠っている。あなた達日本人はそれを省みようもしない。そんなあなた達日本人は人間か！」老僧の言葉を聞き終えた後、偶然一行の中にいたインパール作戦の参加者が涙ながらに語りだした。「最初は遺体に土を掛けて通った。次は遺体をまた



写真3 チェンマイ郊外、タイ・ビルマ方面戦病死者追悼之碑⁸⁾

いで通った。最後には遺体を踏み越えて通った。」と。この事がきっかけとなり僧侶と遺族関係者で慧燈財団を設立し、この地に眠る日本兵の遺骨収集活動を開始した。

チェンマイ県メーワン郡バーンガート・サンカヨーム寺の裏にあった井戸（現在バーンガートウィタヤーコム校の敷地）から多くの遺骨が発見された事から、慧燈財団は平成5年、バーンガートウィタヤーコム校に敷地を借り、その井戸の上に山下徳夫元厚生大臣による揮毫「タイ・ビルマ方面戦病死者追悼之碑」の題字をいただく追悼之碑を建立した。そしてその後の遺骨収集活動で発掘された約1万8千名の日本兵・軍属・関係者の遺骨を納め追悼を続けている。

この地に一人でも多くの日本人が訪れ、祖国の弥栄の為に命を賭して戦争の中で散っていった英霊を偲ぶ事が、ここに眠る1万8千名の勇士に対するなによりの追悼になるのではないだろうか。』

私達は、2011年2月21日そして7月16日に参拝してきた。長い間廃寺となっていたサンカヨーム寺院は、7月に来た時には再建工事が始まっていた。

インパール作戦とビルマ戦線⁹⁾

インパール作戦を主導した第15軍牟田口廉也司令官の言葉が残っている。『英印軍は中国軍より弱い。果敢な包囲、迂回を行えば必ず退却する。補給を重視し、とやかく心配するのは誤りである。マレー作戦の体験に照らしても、果敢な突進こそ戦勝の近道である¹⁰⁾』。後に、インパール作戦の失敗と犠牲の大きさ、異常さを生み出した原因の大半は、つまるところ、作戦構想自体の杜撰さにあったといわれる所以である。当時、強烈な個人(軍司令官)の突出を抑止し得るシステム・仕組みが無かったことは結果的に明らかだが、今の世は、抑止力は機能しているのだろうか? いつの時代にも共通する重いテーマである。

昭和19年(1944年)2月11日、第15軍よりインパール攻撃命令下る。3月8日、作戦発動。

その(作戦の)異常さと悲惨さは、今やあまりにもよく知られている。参加部隊の勇猛果敢さは称賛に値したが、作戦そのものは完全な失敗に終わった。4月末には戦力は40%前後に低下し、限界に近づいた。然も、雨季は例年より早くやってきた。7月2日、作戦中止。インパール作戦の失敗は、ビルマ防衛全体の破綻を招いた。フーコンでも雲南でも敵の反攻の前に、日本軍は敗走を重ねなければならなかった¹⁰⁾。

- ・昭和19年9月7日、雲南・松山(拉孟)守備隊玉砕。
 - ・昭和19年9月13日、雲南・騰冲(騰越)守備隊玉砕。
 - ・昭和19年11月初旬、雲南・龍陵、攻略さる。
 - ・昭和20年4月23日、ラングーン撤退(放棄)。
- 同5月2日、英軍がラングーン奪回。

その他、北タイに残るインパールの痕跡(慰霊碑など)

- ・チェンマイ市内の寺院(2月20日と7月15日、訪問)

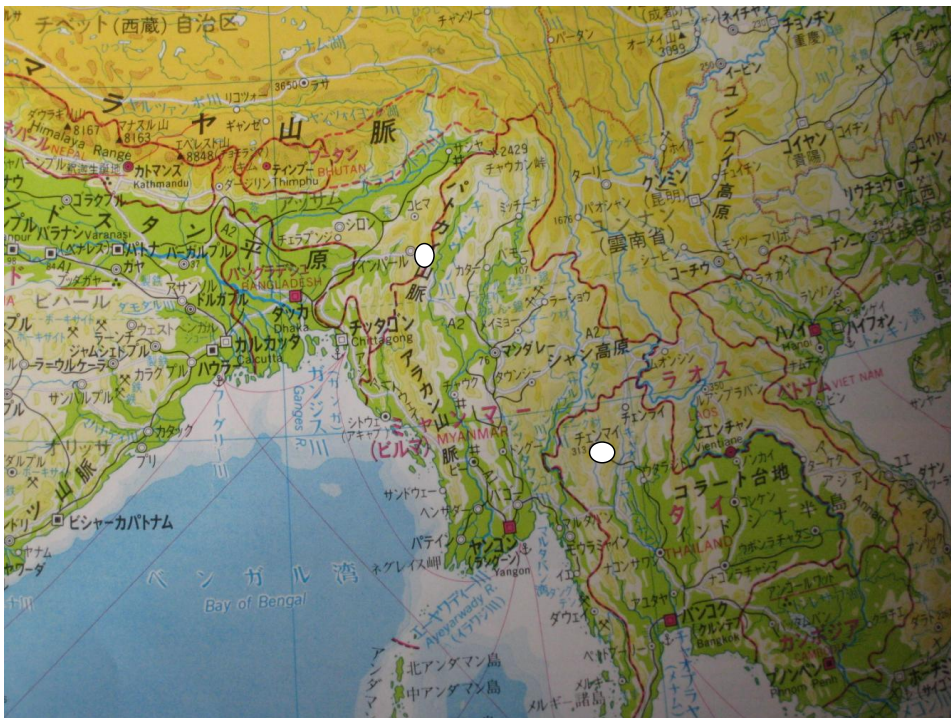


図2 インパール(インド)とチェンマイ(タイ王国)の位置関係(帝国書院編集部編、中学項社会科地図)

かつて日本陸軍の野戦病院が置かれていたムンサーン寺院を訪問し、お参りをした。資料館には日本軍兵士の遺品や当時の写真が展示されている。境内には立派な枝ぶりの菩提樹があり、7月には沙羅双樹の花が美しく咲いていた（写真5）。

- ・チェンマイからパーイを経てメーホンソンに向けた道路建設工事（徴発されたタイ人は白骨街道と呼んだ）⁷⁾

日本陸軍第15師団が担当。人が1人やっと通れるくらいの道を、山を削って4m幅の軍用道路を作っていた。道具はナタとクワ、これしかなかったといい、タイ人作業員が大勢亡くなったという。

- ・パーイに残る日本軍の飛行場跡（2月23日、車内から視察）
- ・ホエパー村とホエパー寺院（2月23日、訪問）

メーホンソンの北方約11kmの所にフィッシュケープ公園がある。洞窟から流れ出る湧水に群がる大中型の鯉に似た魚を見る。公園を訪れる人が餌売りから買って与える野菜やスイカを、猛烈な勢いで喰らいつく。ここを訪れる人達は、魚を聖魚として崇め、決して殺生をしないのだそうだ。

この公園入口から2kmほどのところにホエパー寺院がある。ここでも敗走してきた日本兵が身体を休めたそうで、約400人が寺院から少し離れた場所に埋葬されたという。後日、御遺骨は全て収集され、母国に戻ったとのことで、私達のガイド氏は発掘の折、作業に加わったそうである。

- ・メーホンソンの寺院（2月24日、訪問）
プラノーン寺院の境内にある慰霊碑「ビルマ戦将兵鎮魂之碑」周辺を掃き清め、花と水を供えて焼香。僧侶2名に読経を上げていただく。本堂にて参拝。
- ・クンユアムの北数kmのところにある村の郊外、道端に佇む「祠」と街路樹の枝に架かる「戦友よ安らかに眠れ」と書かれた木片

車内から黙礼。村の寺院から少し離れた道路沿いの場所にある。

- ・クンユアムの戦争博物館¹¹⁾（2月24日、訪問）
私（前田）がタイに残る日本兵の慰霊碑の存在に初めて気が付いたのは、2003年9月3日付、



写真 5-1 チェンマイ市内のムンサーン寺院境内で咲く沙羅双樹の花



写真 5-2 沙羅双樹の花の色



写真 6 クンユアムのムアイトウ寺院に建立されている慰霊碑

朝日新聞朝刊の「声」欄にあった、タイ在住の当時74歳の方の投書であった。「タイの北部で日本兵の慰霊」と題し「タイ北部にチェンマイ市がある。インパール作戦に敗れた日本兵が傷病と飢えにもだえながら山越えをし、この地で亡くなったと言われている。」で始まる小文である。その中で、『(中略) 一方、チェンマイの北西の山地クンユームに日本兵の遺品博物館がある。タイ人の有志により運営されている。館長は言う。「民家が日本兵の遺品を持っていた。優しかった日本兵の思い出を残さねばと思った。それが日本人の民族愛や国への誇りにつながればと考え、遺品を集め陳列している。残念なのは日本人がほとんど来館しないことだ。」(中略) こうした隠れた各地の善行に注目し、外国観光旅行の途中で訪問、慰霊してほしいと願う。』と結んでいる。

戦争博物館は今、管理は個人の手から県当局に移管され、2代目の博物館が新築工事の真っ最中である。

米英に対する大東亜戦争開戦の詔勅が、館内で展示されている。5通発行された内の1通という。

元館長の Chiedchai Chomtawat さんは平成19年春の叙勲で、授賞された。在タイ日本大使館で行われた伝達式でチューチャイ氏を紹介した部分を、1部簡略化して以下に掲載する。

『旭日双光章を受章されたチューチャイ・チョムタワット氏は、1995年に警察署長として赴任されたメーホンソン県クンユーム郡で、第二次世界大戦中に駐留していた旧日本軍に関する調査を続けてこられました。

1996年には自ら買い集めた旧日本軍の遺品などを展示するクンユーム郡第二次世界大戦博物館を設立され、1998年にはそれまでの調査を元にした「第二次世界大戦でのクンユームの人々の日本の兵隊さんの思い出¹²⁾」を執筆されました。さらに2005年には博物館の運営や日タイ交流を目的とする平和財団を設立されました。同氏のこのような献身的なご努力、ご功績に対しては、2006年6月にタイをご訪問された天皇皇后両陛下からも直接ねぎらいと評価のお言葉がありました。

同氏の調査により、当時の日本軍の生活ぶ

り、日本軍とクンユーム郡の人々の交流、戦争末期の日本軍の悲惨な状況などが明らかになりました。こうした事実は、日本人が自らの歴史を振り返るための貴重な材料であるとともに、修好120周年を迎える日タイ関係の歴史の一齣(ひとコマ)として長く記憶されるべきものであります。』

・クンユームの戦争博物館の筋向かいにある寺院 (2月24日、訪問)

ムアイトウ寺院の境内にある慰霊碑「ビルマ戦線将兵鎮魂之碑」(写真6) 周辺を掃き清め、寺の高僧に読経をあげていただく。碑の裏面に書かれた文言を紹介する。「旅人よ 日本の國を通ることあらば 伝えよかし ビルマ戦線将兵達は祖国の夢を見 帰ることなし この地クンユーム迄来て遂に力尽きぬ 時は昭和20年7月頃」とあった。

・クンユームに残る日本軍の飛行場跡 (2月24日、車内から視察)

・Golden Triangle を見渡す丘の上に立つ彼我の慰霊碑 (7月18日、訪問)

Golden Triangle 一帯を見渡すことの出来る丘の上に、駐車場・お土産店と共に「展望台」がある。更に50段ほど参道を上がるとプラタート・ブーカオ寺院がある。759年頃の創建という古刹である。

この参道の中程に、日本軍将兵の慰霊碑があった。この一帯で約1,000名の日本兵が命を落としたという。注目すべきは、日本兵の慰霊碑の隣に、‘理不尽な死を余儀なくされた現地の人達’を悼む「慰霊碑」があったことだ。この丘は、メコン河を見守る黄金仏の坐像の直ぐ背後にある。

おわりに

タイ・ミャンマー・ラオスの3国がメコン河で接する「Golden Triangle」と言えば、ケシ栽培、麻薬製造・流通・販売、各種武装勢力の資金源…といった言葉に象徴された強烈な負のイメージがある。

今回北タイを旅してみて、タイでのケシ栽培・麻薬の製造はほぼ消滅したように感じる。

要因としては、当局による厳しい取締り、国境付近の山岳地帯における王室プロジェクトの推進

による地域に根差した雇用機会の創出、ケシに代わる換金植物の導入と成功、タイ王国自体の経済発展に伴う山地民の貧困度合いの改善…である。更に、国共内戦に敗れ長い間タイ・ミャンマー国境付近の広大な山岳地帯を不法に占拠していた中国国民党軍のタイ国内への移住がある。勿論、周辺関係国の政情の安定化傾向、経済的発展、当局の不斷の努力も加わるだろう。

2011年10月25日付「日本語総合情報誌@タイランド」に「メコン川で中国船襲撃12人殺害・1人不明」という見出しがあった。記事の内容は、「タイ北部チェンライ県チェンセン郡のメコン川で、タイ当局が中国船籍の貨物船2隻を強制捜索し、麻薬密売容疑の中国人1名を射殺、覚醒剤92万錠を押収した。貨物船は中国からタイへ下る途中に麻薬密輸業者に乗っ取られたとみられ、チェンセンで10月7日8日の両日、メコン川を流れてきた中国人船員とみられる男女12人の遺体が回収された。」というものであった。

Golden Triangleは穏やかな風景とは異なり、今も恐ろしい、危険が一瞬に変わりは無い…と改めて感じた。現在の国境線である限り、地政学的に、今後も抜本的に改善されることは無いだろう。

周辺諸国の一層の政情の安定と地域経済の発展によるケシ栽培の撲滅と雇用機会の創出、結果としての山地民の貧困度合いの改善と山地民固有の文化・伝統の継承を願うばかりである。

北タイの旅もまた、「己の無知を知り（知らされ）、自己研鑽に励む出発点に立った」旅となった。タイ仏教のことも理解を深めたいと思っている。

参考文献

1. 新谷忠彦「タイ族が語る歴史」2008年3月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、叢書 知られざるアジアの言語文化Ⅰ、序文P iii、P3～14。
（序文p iiiで「なずける」とあるのを「名付ける」とした。前田記）
2. 田中治彦「北タイのNGO活動の歴史と課題」2006年3月25日、『立教大学教育学科研究年報』第49号（2006年1月、p101～122）所収の同名の論文の元原稿。
3. 片岡 樹「領域国家形成の表と裏—冷戦期タイにおける中国国民党軍と山地民—」東南ア

ジア研究 42 巻2号、2004年9月

4. クリスチャン・ダニエルス他「自然と文化そしてことば2007.03、特集：国境なき山地民—タイ文化圏の生態誌—」葫蘆舎、2007年8月。ISBN 978-4-86209-021-8、p85～95。
5. 梅棹忠夫「東南アジア紀行（上）」中公文庫、1995年、P196、225。
6. 原 正利「タイ北部ドイインタノンの植生」日本熱帯生態学会ニューズレター、No.51、May30, 2003
（本文中では、「ドイ・インタノン」に統一して記載した。前田記）
7. 神埼 護「タイの熱帯山地林の大面積長期生態観察」京都大学農学研究科森林科学専攻、熱帯林環境学分野、神埼 護のウェブサイト
8. タイ国財団法人 慧燈財団ホームページ
9. 後勝「ビルマ戦記—方面軍参謀 悲劇の回想—」光人社、p83、p95、p109、p257。
10. 戸部良一他「失敗の本質—日本軍の組織論的研究—」ダイヤモンド社、p92、p111、p114、p116。
11. クンユアム第二次大戦戦争博物館ホームページ（メーホンソン県立クンユアム旧日本軍博物館）
12. Chiedchai Chomtawat「第二次世界大戦でのクンユアムの人々の日本の兵隊さんの思い出」ISBN 947-85446-9-9、p21～23。
13. 齋喜國雄「第1回タイ文化圏Study Tour 行動記録・写真記録」雲南懇話会ホームページ

参考資料

第1回「タイ文化圏」Study Tour

1. 参加者：L；岡 邦俊、亀田義憲、川畑直美、齋喜國雄、古瀬駿介、（Coordinator）前田栄三
2. 日 程（2011年2月19日～2月27日）
2/19、第1日：NRT 発～BKK 経由～CNX（チェンマイ）18時30分到着
センタラ・デウワンタワンホテル泊
2/20、第2日：チェンマイ市内観光（国立博物館、民俗博物館訪問。ブラシン寺院、チェデルアン寺院、チェンマン寺院参詣）。ムンサーン寺院内にある「慰霊碑」参詣。
センタラ・デウワンタワンホテル泊
2/21、第3日：ドイ・インタノン国立公園を訪問、山頂に立つ。仏塔・シリターン滝・ワチラターン

滝など訪問。チェンマイ郊外の「慰霊碑」参詣。

センタラ・デウワントワンホテル泊
2/22、第4日：チェンマイ発～パーイへ移動。パーイ川に架かる「橋」と「祠」を視察。山岳部に住むメオ族、リス族、ラフ族の村々を訪問。

パーイ・ホットスプリング・スパリゾート泊
2/23、第5日：パーイ発～メーホンソン着。ミャンマー国境に近い山地民ラックタイ村、ルアムタイ村訪問。メーホンソン市内観光（ドイコンムー寺院、ジョーンカム寺院、ジョークラーク寺院拝観）マウンテン・イン泊
2/24、第6日：メーホンソン発～クンユアム～メーラノーイ～メーサリアン着。ミャンマー国境のカレン族（首長族）の村視察。クンユアム戦争博物館訪問。「慰霊碑」のあるムアイト寺院参詣。ゲーオゴーモン洞窟視察。

リバーハウス・リゾート泊
2/25、第7日：メーサリアン発～ジョムトーン～チェンマイ着。オップルアン渓谷視察。プラタート・ジョムトーン寺院参詣。

センタラ・デウワントワンホテル泊
2/26、第8日：チェンマイ市内観光（ドイ・スティーブ寺院参詣）、ドイ・スティーブ寺院の山奥のモン族の村訪問。チェンマイの旧都ウィアングンガム遺跡視察。

センタラ・デウワントワンホテル泊
2/27、第9日：チェンマイにて解散。

参詣。

センタラ・デウワントワンホテル泊
7/17、第4日：チェンマイ発～北上してメーサイへ移動。メオ族の市場、ラフ族・首長族（カレン）・アカ族の村々を訪問。

メーサイ・ピヤボンプレイス泊
7/18、第5日：Golden Triangle 地域訪問、アヘン博物館・展望台訪問。「慰霊碑」参拝。古都チェンセーン視察。メーサイでミャンマー側へ入国・観光。メコン河遊覧。メーサイ・ピヤボンプレイス泊

7/19、第6日：ドイトウン等王室プロジェクト視察、チェンライ山岳民族博物館視察。

チェンライ・ウエンインホテル泊
7/20、第7日：チェンライ市内観光、ラオス国境の町チェンコーン訪問、舟でメコン河を渡りラオス側の街フエサイを訪問。

チェンライ・ウエンインホテル泊
7/21、第8日：国立博物館訪問。チェンマイ市内観光（ドイ・スティーブ寺院参詣、寺院の山奥の山岳民モン族の村訪問）。

センタラ・デウワントワンホテル泊
7/22、第9日：チェンマイにて解散

第2回「タイ文化圏」Study Tour

1. 参加者：L; 神山 巍、本郷 一雄、(Coordinator) 前田 栄三

2. 日程 (2011年7月14日～7月22日、全9日間)

7/14、第1日：NRT 発～BKK 経由～CNX18時30分着 (CNX 集合)

センタラ・デウワントワンホテル泊
7/15、第2日：チェンマイ市内観光（民俗博物館訪問。ブラシン寺院、チェデルアン寺院、チェンマン寺院参詣）。ムンサーン寺院内にある「慰霊碑」参詣。

センタラ・デウワントワンホテル泊
7/16、第3日：ドイ・インタノン国立公園を訪問、山頂に立つ。仏塔・シリターン滝・ワチラターン滝など訪問。チェンマイ郊外の「慰霊碑」

Summary

Visiting Minorities Villages (Hmong, Karen, Lahu, Akha, Lisu) in the Southern Part of Tay Cultural Area, Northern Thailand

Eizo Maeda^{1,2)}, Kunio Saiki²⁾

1) The Academic Alpine Club of Kyoto, 2) Yunnan Forum

From Feb19 to February 27, 2011 and July 14 to July 22, 2011, we visited the Southern Part of Tay Cultural Area, which is located in the Northern Thailand.

Our aims and visiting places were as follows.

1. I visited and observed several Minorities Villages (Hmong, Karen, Lahu, Akha, Lisu) and The Doi Pui-Hmong's Hilltribe Museum and Tribal Museum Chiang Rai, The House of Opium (Museum).
2. I observed Royal Projects at the three Locations. Royal Agricultural Station Inthanon, Royal Doi Tung Project (including Mae Fah Luang Garden), Pangtong Royal Project Development Center.
3. I visited Chinese Villages at the three Locations (including Mae Salong).
4. It seemed to be the most important and difficult problems definitely, that was the presence of KMT(Kuomintang of China)-Chinese troops in the northwestern borderlands of Thailand, from the 1950s through the 1980s.
5. I visited some Japanese soldier's and Thai people's Memorial monuments, and the Khun Yuam WW2 Japanese War Museum.

This report is an essay rather than an academic report of what we have observed.

This report also showed some points aimed at the modern history of the northwestern borderlands of Thailand, northeastern side of Burma and southwest side of Yunnan, China.